



東京・春・音楽祭 2026
SPRING FESTIVAL IN TOKYO

【チュルリョーニス サウンドスケープを追って】

交響詩《森の中で》（ピアノ 4 手版）

チュルリョーニスが二十代半ばで書いた「リトアニア初」の交響詩とされる作品。祖国の深い森に差し込む光、樹々のざわめき、そして自然への畏怖の念が、瑞々しい旋律として迸り出る。原曲は管弦楽曲であるが、今回は連弾（ピアノ 4 手）版でお届けする。

セファ エセック変奏曲

チュルリョーニスの知的な側面が光るピアノ曲。タイトルの「Sefas Esec（セファ・エセック）」とは、音名の配列（S-E-F-A-S-E-S-E-C）にもとづく暗号的なテーマを指している。画家でもあったチュルリョーニスらしい、幾何学的な美しさに変幻自在な音の変容を楽しむことができる。

前奏曲 イ短調

チュルリョーニスには「前奏曲」と題されたピアノ曲が複数あるが、なかでも本作は内省的かつ変化に富んだ表情を見せる。左手が奏でる低い持続音に乗って、清濁併せ呑む旋律が綴られていく。

3 つの小品 より ナイチンゲール

鳥の歌声を模したピアノ曲。単なる自然描写にとどまらない、チュルリョーニス独自の感性により、ここで聴かれるナイチンゲールのさえずりは、どこか幻想的で、異世界にも通じる美しさを帯びている。

交響詩《海》（ピアノ 4 手版）

チュルリョーニスが三十歳前後で作曲した、音楽的到達点とも言える壮大な交響詩。彼は「海」をモチーフとした絵画も残しており、インスピレーションの源泉であったと推察される。このピアノ 4 手版では、荒れ狂う波の力強さから、静まり返った水面の煌めきまでが、オーケストラに比肩し得るスケールと精密さで持って描き出される。